

プログラム

2006年11月11日（土）

■第1部：塩と文化（使用言語：日本語）

司会：福永 健二氏（地球研）

13:25～13:30 佐藤 洋一郎（地球研）
開会の挨拶

13:30～14:20 片平 孝（写真家）
「世界の塩」

14:20～15:10 高梨 浩樹（たばこと塩の博物館学芸員）
「ヒトと塩の物語～製塩の歴史～」

15:10～15:25 休憩

15:25～16:15 岸本 雅敏（考古学者）
「考古学から見た日本古代の塩」

16:15～17:05 奥村 彪生（伝承料理研究家）
「塩と食文化」

17:05～ 渡邊 紹裕（地球研）
閉会の挨拶

懇親会

第1部：塩と文化 講演者紹介

■片平 孝氏（かたひら たかし）

写真家。1943年生まれ。1972年にサハラ砂漠で塩を命懸けで運ぶキャラバンの世界に接したことがきっかけで塩の世界に魅せられ、以来、三十年以上にわたって世界中の塩の産地を撮影してきた。2004年には代表作といえる写真集「地球 塩の旅」（日本経済新聞社発行）を出版。著書に、「雪の一生」、「塩・海から来た宝石」、「砂漠の世界」（以上、あかね書房）、「星の旅」（朝日新聞社）など。

■高梨 浩樹（たかなし ひろき）

たばこと塩の博物館学芸員。1968年生まれ。1995年に筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了後、現在に至る。専門分野は、塩全般（とくに塩の科学と製塩技術史）・生態人類学。2002年より（財）塩事業センターの「知のWebマガジンen」にて、人と塩の関係を多角的に物語る「塩の博物誌」を隔月連載中（<http://web-en.com/>）。著書に「塩の絵本」（高梨浩樹編・沢田としき絵、農村漁村文化協会）がある。

■岸本 雅敏（きしもと まさとし）

考古学者。1948年生まれ。考古学の立場から、古代日本における塩の生産や流通の問題をとりあげ、日本古代史の研究を行ってきた。現在 富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所所長。著書に「古代国家と塩の流通」（『古代史の論点』3、小学館）、「激動の埋蔵文化財行政」（共編著、ニューサイエンス社）、「塩」（『暮らしと生業』列島の古代史2、岩波書店）など。

■奥村 彪生（おくむら あやお）

伝承料理研究家。1937年生まれ。奥村彪生料理スタジオ「道楽亭」主催。日本の食文化の伝承をテーマに、日本の古代から最近までのさまざまな料理を研究・復元。“今晚はこれで決まりですね！”の決め言葉で有名な関西テレビ「今晚なに食べたい」のパーソナリティ。著書に『おくむらあやおのごはん道楽！ 古今東西おいしい米料理』、『おくむらあやお ふるさとの伝承料理』全13巻（以上、農文協）など。

2006年11月12日(日)

■第2部：塩と環境(使用言語：英語)

司会：久米 崇(地球研)

09:55～10:00 日高 敏隆(地球研)
開会の挨拶

10:00～10:50 前川 和也(国士舘大学)
「古代シュメールにおける耕地塩化」

10:50～12:00 伊藤 敏雄(大阪教育大学)
「古代楼蘭の環境と塩」

12:00～13:30 昼食休憩

13:30～14:20 セリム・カプール(トルコ、チュクロヴァ大学)
「トルコにおける塩類集積と歴史から見た塩害問題」

14:20～15:10 久米 崇(地球研)
「世界的視野から見た塩害問題」

15:10～15:25 休憩

15:25～15:55 総合討論

15:55～ 佐藤 洋一郎、渡邊 紹裕
閉会の挨拶

第2部：塩と環境 要旨

「古代シュメールにおける耕地塩化」

前川 和也 (国士舘大学)

古代メソポタミアの耕地塩化は、1958年ヤコブセンがアダムズと連名で公刊した論文で、はじめて本格的に議論された。彼は前24世紀頃からシュメールで塩化が深刻になったとする。彼は前24世紀以降、単位面積あたりの生産力がしだいに低下したこと、小麦、エンマー麦の栽培比率が極端に低くなったことを根拠とした。耕地塩化のためセトゥルメントが放棄され、ウル第3王朝時代(前21世紀)がおわると、政治権力の中心は、南部(シュメール)から塩害の少ない北部へと移ったという。

1967、1974年には、私も前24、21世紀の農業生産を論じて、ヤコブセンとほぼ同様な結論を得ている(私は、前24世紀の生産力水準、21世紀の大麦耕地の割合を計算するにあたって、ヤコブセンセンと同一の史料を用いていたことが、のちに明らかになった)。

その後パウエルらの反論もあったけれども、私はいまも、前21世紀には塩化がきわめて深刻になったと確信している。ただヤコブセンと私は、当時のラガシュで大麦耕地が全耕地面積の98%を占めたと結論したが、これには留保が必要である。この時代には、大麦耕地に豆類、玉葱類、コリアンダー、ハーブ類も混植されていたことがわかったからである。

ヤコブセン・アダムズ論文は、1957-58年イラク・ディヤラ地方で彼らが行なった考古学調査報告の要約でもあった。じつはほぼ同じ時期に、イラク南部で農業サーヴェイと人類学調査も独立して実施されており、のちに公刊されたそれらの成果でも、耕地塩化の深刻な影響が論じられている。これらの仕事に影響され、1. 大規模灌漑はかならず塩化をひきおこす、2. 大規模灌漑がメソポタミア文明を生んだのではなく、大規模灌漑はその結果である、という命題が論じられるようになった。これは、大規模灌漑が専制権力と結びつき、いっぽう小規模灌漑は部族レヴェルの協同作業で実現するという誤った2分法にもとづいている。私は、前4千年紀の終わりごろ、効果的な灌漑システムを作り出すことによってシュメール都市国家が生まれたと考える。都市国家体制は、のち1000年間も存続する。都市国家ににあうレヴェルの灌漑システムが機能していたにちがいない。

「トルコにおける塩類集積と歴史から見た塩害問題」

セリム・カプール（トルコ、チュクロヴァ大学）

トルコは過去 50 年にわたり灌漑農業のために水資源を開発してきた。これは農村地帯の豊かさの向上に大きく貢献した一方で、農地での適正な土・水管理がなされず、各地で塩害を生じる結果にもつながった。

この最も顕著な例は近年開発された南アナトリア灌漑プロジェクト（通称 GAP）である。完成時には 170 万 ha の農地が天水農業から灌漑農業に移行するが、半乾燥の気候と塩の溶脱が困難な重粘土が原因となり、塩害が進行している。

中央アナトリアに位置する大コンヤ流域は、現在のトゥズ湖一帯の後更新世に形成された塩湖湖底と隣接する立地から、二次的塩害が生じている。この地域では新石器時代より穀物と牧草の栽培が行われてきたが、ここで将来灌漑を拡大すると、古地形に存在する塩性地下水に由来する塩害の危険性を急激に高める結果となる。

このような地域の持続的に管理し、淡水資源を保全するためには、土地原産の天水穀物の栽培と耐塩性植物をうまく利用した牧畜による草原の管理が望ましい。